寺田李（すもも）のはなし〈その2〉

市史の窓No.7

李は中国五果の一つで、日本への渡来も古く、長命な果樹です。

寺田李の最盛期には、木津川の船便によって京都・大阪・神戸へ出荷され、東京・横浜・青森・北海道など遠隔の地には汽車積で出荷されていました。

また、大正四年頃までは、ソ連への輸出も少なくなかったようです。

その頃、輸出するのに頭をいためたのが荷造りでした。

初めは石油の空箱を三分して使っていたがあまりみばえの良いものではなかったので、松や栂（とが）で箱を造り、底に麦わらを敷き、果実を薄い柔い紙で包んで並べ荷造りをしました。

そして、箱の横にレッテルを貼り、送り先きと栽培者の氏名を記入し、畑地に通ずる路傍に置いておきますと、荷扱者がこれを集めて指定の商店に運搬していたということです。

李の原木でつくられた額

しかしこんなに盛んであった寺田李が、どのような理由によって桃に作付畑をゆずらねばならなかったのであろうか。

その道の識者によりますと、その当時、激化した戦争により、人手が不足し、果実の袋掛けができなくなった。

農薬が入手できなくなった。そして致命的な原因として日焼病を防ぐ方法がなかったという理由をあげておられます。

寺田李の最大の病害であった日焼病については、京都府農事試験場桃山分場から大正六年に提出された「調査研究報告第一号」の中で詳細に述べられています。

森沢氏は曾祖父の遺志を受けつき懸命の努力を続けられましたが、病害に抗しきれず昭和二十五年には李の栽培を全面的に桃の栽培に切りかえられました。そして残された原木で額を二つ造り、記念品とされました。

その後、昭和三十九年に森沢氏は富山県の村上氏に李の接木穂十本を託され、現在ではその最後の苗木が富山の地で脈々と寺田李の伝統を守り続けているとのことです。（植物図鑑の中にも寺田スモモとして現在でも紹介されています）

（T）